

国語学会創立十周年を迎へて

国語学会
代表理事

時 枝 誠 記

国語学会は、昭和十九年三月に創立せられ、今年十周年を迎へることになりましたので、ここに記念講演会並に討論会を催すことになりましたので、この機会に創立当時のことを回想し、学会今後の活動に対する心構へを新たにしたいと思ひます。

国語学会は、故橋本進吉博士の提唱によって創立されたものであります。當時を振り返つて見ますと、昭和十八年三月、橋本博士は、停年制によって東京大学の教壇を去られることになりましたが、当時の学界の状況を見ますと、言語学会は既に古くから設立されて居り、その他音声学協会、方言学会等も活動して居りましたが、肝腎の国語学を中心とし、国語学のすべての分野を包括した全国的学会といふものは、まだ作られて居りませんでした。橋本博士は、これを遺憾に考へられ、東京大学を去られた機会に、全国的学会を設立することを計画され、先づ東條操氏、岩淵悦太郎氏、それに私も加へて、この計画の実現についての御相談がありました。この計画の具体化として、京都大学の遠藤嘉基博士、広島文理科大学の土井忠生博士に呼びかけられました。時あたかも太平洋戦争のさ中でありましたが、遠藤、土井両博士には再参上京されました、学会設立の計画準備は着々と進められたのであります。十九年三月になりました既に活動して居りました方言学会を吸収して、学会を創立する發起人会が開かれ、会規要綱も決定いたし、發起人会全員によって、橋本博士が会長に推挙されました。このやうにして、学会の骨組は出来上りましたが、十九年春には戦争もいよ／＼はけしくなり、学

会創立を全国に宣言するための創立総会も、講演会の開催も不可能になり、ただ、橋本博士が会長を受諾された十九年三月三十日を以て創立の日とすることを記録に止めて国語学会は発足することになったのであります。創立と同時に発刊を予定して居りました機関誌「国語学」も、表紙の凶案まで整ひながら遂に発刊に至らなかったのであります。

ところがここにはからずも、昭和二十年一月末、会長橋本博士は、東京空襲が漸く本格的にならうとする時、突如として逝去せられ、国語学会は、混沌のまま終戦を迎へることとなったのであります。

国語学会が、戦火の中から立上り、活動を開始したのは、終戦の翌年昭和二十一年六月のことです。当時、機関誌の刊行は到底許されない事情にありましたので、これに代るものとして、公開講演会の開催と、パンフレット程度の会報を発行いたすこととし、六月に東京において第一回の講演会を開き、次いで十一月には京都において開催し、以後二十三年雑誌が刊行されるまで、毎月一回学術講演会を開くことになりました。

戦後の混乱時代に毎月一回の講演会を開催し続けて来たことは、国語学会の大きな誇りとしてよいことと思ひます。終戦後、国語学会が、他の学会にさきかけて逸早く学会活動を開始いたしましたことは、国語学会がぬげがけの功名を争ったといふことでは決してないのであります。それは、戦後において、国語が色々な面において、重大な問題に直面し、そこに学術的研究の関与が強く要望されたからに他ならないのであります。

国語学会成立当時も、国語の重要であることは、教育面においても政策面においても、今日とは別の意味で痛感されたことで、そのことは学会設立の趣意書にもうたはれたことであります。そのことは、今日といへども決して解消しないばかりか、猶一層重要な意義を持って来たことは、会員諸氏の周知されるところであります。国語は我々の日常卑近の生活に関係するばかりでなく、日本の文化のあらゆる部面に関係を持ち、その基礎となるものであることは今更いふまでもないことであります。従つてその問題も広範囲に亘り無限にあるといふことが出来ます。しかし、この広い無限の問題を

処理するために、国語学の体系を整へ、理論を深めてこれに対処して行くといふことは、容易ならぬことであり今後に残された重要な課題であります。

学会は戦後の経済的その他の苦難に満ちた道をともかくもここまで切り開いて参りました。終戦後の国語学の全領域の歩んだ道を静かに振り返って見る時、人それぞれに見る目が異なりませうが、一見平静に見える学界の底には、十年の歳月にふさはしい潜在力が蓄積されたことを思ふのであります。外界の厳しい風や雪にも打ひしがれなかつた新しい芽が、次第に伸びつつあったことを感ずるのであります。それにつけても学界の支へとしての全国的学会の基礎を築かれた故橋本博士の学徳をしのぶ情を禁じ得ないのであります。これを一つの時期として、会員諸氏の一層の御奮発と御協力を切望する次第であります。これを以て十周年記念会の御挨拶といたします。(昭和二十九年五月十五日)